

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校
校長 酢谷昌義



みんなのために図書整理

「書く力」を育てる

今朝の全校集会で、昨年行われた第55回読書感想文コンクールの入賞作品を紹介しました。小学校は低・中・高学年に分かれ、中学校・高等学校と全部で5つの部門で審査されます。今日はその最優秀に選ばれた作品の中から、小学校3年生が書いた「ぼくにできること」という題の感想文を読んで聞かせました。

作者は「地球温暖化、しずみゆく楽園ツバル：あなたのたいせつなものはなんですか？」という本を読み、自分とツバルの子ども達を、生活や考え方の違いに目を向けながら感想をまとめています。

最優秀に選ばれた作品ですから、大変素晴らしいのは当然ですが、こうした作品は読んだ人に何か訴えるものを持っていると改めて感じました。それは子ども達の聞く姿勢からも分かりました。全校集会で話をする時、子ども達はいつもきちんと聞いています。今日感想文を読んでいる時には、いつも以上に子ども達の



ブックカバーを作っています

目が真剣だったように感じました。作者の思いに共感する部文がたくさんあったからではないかと思います。

感想文を書くということは本当に難しいものですが、最近強く感じることは、書く力についても「二極化」が進んでいるのではないかということです。いくら指導しても説明しても、感想文に全くならない場合が多くなってきています。

作文の中でも感想文は特に難しいものです。感想文が書けるといことは「書く力」を十分につけていると言っても良いと思います。ではどうやってその力をつけるかとい

うことですが、書くことを繰り返さない限り「書く力」はつきません。これは当然のことですが大変重要です。そして、良い作文にたくさん触れるということも大切です。良いものに触れその良さが分かれば、自分の作文にも生かすことができるのです。いわゆる真似るといっていますが、この方法はとてもすぐれたものです。単なる真似に終わらず、必ずその人らしさが出るようになるからです。

書く指導は大変時間がかかります。だからこそおろそかにしてはならないと、子ども達が聞いている姿を見て強く感じました。

2010年読書感想文コンクール「課題図書」の紹介

3週間後には夏休みに入ります。長い夏休みの間に、読書感想文にも挑戦してほしいと思います。

こちらではなかなか手に入りませんが、今年度の「課題図書」を紹介します。素晴らしいものばかりですから、チャンスがあれば、ぜひ読んでみてほしいと思います。

低学年

- ・ミリーのすてきなぼうし
- ・とっておきの詩
- ・むねとんとん
- ・いじわるなないしょオバケ!

中学年

- ・こぶとりたろう
- ・点子ちゃん
- ・ともだちのしるしだよ
- ・やんちゃ子グマがやってきた! 森からのメッセージ

高学年

- ・すみ鬼にげた
 - ・建具職人の千太郎
 - ・リキシャ ガール
 - ・海は生きている
- 中学部
- ・明日につづくリズム
 - ・ビーバー族のしるし
 - ・奇跡のプレイボール
- 元兵士達の日米野球 -

校長室便り

(文責)
トー八
日本人学校
校長 酢谷昌義

子どもにも「格差」

日本にいた時、解剖学者の養老孟司さんの講演を聴いたのがきっかけです。しっかり養老さんにはまってしまい、それからちょくちょく養老さんが書かれた本を読むようになりました。脳科学の視点から興味深い指摘をたくさんされているのですが、その中で「真の格差は今後、子どもの脳の発達にこそ現れる」と指摘されていたところがずっと忘れられずにいます。

自然との関わり・遊びの内容や質によって、脳の発達に大きな格差が生まれてしまうのだそうです。具体的には、子どもの発達には「外遊び」が欠かせず、しかも、その外遊びはコンクリートの地面より、田んぼや山など変化に富む地面のほうがいいのだそうです。

人間の脳にとって、外からの刺激はとても重要で、素足を通して受ける大地の感触によって、また、外に出て体を動かして遊ぶことによって、「ものには違いがある」とい



逆さ感覚を養う背支持倒立

うことを学ぶことができるのだそうです。この「違いがある」ということが認識できないと、勉強はもちろん状況に応じて体をコントロールすることもうまくできなくなるようです。

もっと大変だと思ったのは、「親にそういう知識・意識・意欲があるかないかで、子どもの脳の発達に重大な格差が生まれる」というのです。

確かに私たちが子どもの頃の遊びは、どっぷりと自然の中に浸った遊びがほとんどでした。山の中を走り回り木に登り、川や海では素足になって魚を追い回し、毎日泥だらけでした。こんなふうにならぬように自然の中で自分の体を自分の力で動かし、その都度、外界の見

アシュラフさん 毎日ありがとうございます!

学校の周辺は毎日のように工事があり、しかも風当たりが強い場所なので砂ぼこりがとても気になります。

そんな学校を毎朝アシュラフさんが掃除してくれます。早朝から1時間以上かけて、本当に良くやってくれています。玄関・玄関ホール・運動スペースといつもきれいにモップがけをしてくれるのです。それでも風の強い日には、午後になると校舎内の床はすぐ



みんな上手にブリッジができます

え方が変わってくるという経験がなければ、言葉そのものもできなくなると言われているのです。

遊びの重要性については何度も触れていますが、思うように遊べない国で子ども達は生活しています。だからこそいろいろな働きかけをしていかなければならないと考えています。

「自然の中で素足になって」は無理ですが、できるだけ小さい時から回転感覚と逆さ感覚を身に付けさせておくことは、子ども達の脳に刺激を与える意味でも大変重要なことではないかと考えています。週1時間の校舎内の体育では、こういうことも意識して取り組んでいきます。

に白っぽくなってきます。

全校で行う運動スペースの掃除は、週に1回しかできません。アシュラフさんのおかげで気持ちよく遊ぶことができるのです。見えないところで支えてくれる人への感謝を忘れずにいたいと思います。



毎朝ていねいに拭いてくれます

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校校長
酢谷昌義

北爪大使御夫妻の話を聞いています

よくやった「日本」!

昨日のサッカー・ワールドカップ「日本対パラグアイ」の一戦は、手に汗握るという表現がぴったりの大変素晴らしい試合でした。日本国内はもちろん盛り上がったでしょうが、私達海外で生活する日本人にとっては「日本」という国と、自分が「日本人」であるということにより強く意識する時間にもなったのではないのでしょうか。

戦っている選手達が映る画面を見ながら、日本のサッカーもずいぶんレベルアップしたことを感じました。私が子ども頃、イングランドのリーグ戦を時々テレビで見ることができました。その技術の高さに感動しながら、食い入るように見ていた記憶があります。国際試合では1968年のメキシコ・オリンピックで、釜本選手の活躍で3位になったことが大きなニュースになりましたが、それ以外ではあまりぱっとしない時代が長く続いたように思います。

ワールドカップでも、1次



毎日掲げている日の丸

リーグ突破が大きな壁であったことを思うと、今回は予選から本当に素晴らしい試合の連続だったと思います。

私はサッカーに詳しいわけではありませんが、どんなスポーツも見るのは大好きです。特に日の丸をつけた日本の選手が戦っているのを見ると、応援せずにはいられなくなります。おそらくみんな同じではないのでしょうか。それが日本人だということなのだと思えます。

海外で生活すると、日本にいる時以上に日本を意識するようになります。自分が日本人だということもたびたび考えさせられます。このことは、前回ドーハで3年間を過ごして、私にとっては大変貴重な経験となりました。そして今

日も、前回以上にそのことを強く感じています。

先日日本国大使館を訪問した際、北爪大使から子ども達に「みなさんも日本を代表しています。」というお話がありました。確かにそうなのです。日本を離れて生活する者は、ある意味みんな日本を代表しているのです。私はそういう考え方がとても大切だと思っています。

昨日のパラグアイ戦は、多くの日本人に感動を与えた試合ではないかと思えます。勝敗は時の運、選手達は本当に素晴らしかったと思います。日本を離れているからこそ、選手達の活躍がより嬉しく、また頼もしく映りました。「よくやった、日本!!」心から拍手を贈ります。

明日は「第1回水泳記録会」

みんなどれだけ伸びたかな?

先週のオリックスで案内いたしましたでしたが、明日は今年度第1回目の「水泳記録会」です。午後2時から3時まで、通常の水泳授業の時間を使って行います。

ドーハ日本人学校では、水泳授業に力を入れています。戸外での運動ができない期間が長いこの国では、水泳は大変有効な運動です。それぞれの力やレベルにあわせた、効

果的な全身運動ができるからです。

子ども達の頑張りをぜひご覧になってください。



力強いバタ足の練習